大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ピエール・ボエスチュオー研究　補遺１『キリスト教の普遍的（カトリック）教会の迫害の歴史』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鍛治, 義弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017634

ピエール・ボエスチュオー研究　補遺１
『キリスト教の普遍的（カトリック）教会の迫害の歴史』

鍛　治　義　弘

ピエール・ボエスチュオーの『キリスト教の普遍的（カトリック）教会の迫害の歴史』[1] は1572年にヴァンサン・ノルマンにより刊行された。ミシェル・シモナンによれば、ボエスチュオーは1566年７月４日から８月30日の間に死亡[2] しているので、死後刊行版である。この書のタイトルにも「故ピエール・ボエスチュオーによる」と明記されている。

しかし『迫害の歴史』はボエスチュオーが残したままで出版されたのではない。コット・ブランシュ Cotte Blancheへの献辞で友人のピエール・ド・シスチエールPierre de Cistieresなるものは次の如く証言する。

「ボエスチュオー殿によって戦う教会の迫害と名づけることを望まれた遺作が私に委ねられましたが、この作はその父の突然の死により、その四肢の一部が欠けて不完全なままでした。そして未熟で月足らずのものとして世に出ないために、欠けて切断されたものを形成し完成するよう、私たちの友情によって、頼まれ懇願されました」[3]

さらに印刷商から読者へと題された文には次のようにも記されている。

---

[1] HISTOIRE DES / PERSECVTIONS / DE L'EGLISE CHRESTIENNE / ET CATHOLIQVE, FAISANT VN EM-/ ple discours des merueilleux combats qu'el-/le a soutenuz, estant oppressée & affligée / soubs la tyrannie de plusieurs Empereurs / Romains, commençant à nostre Sauueur Ie-/ sus Christ, & à ses Apostres, & quelle a esté / la constance de leurs successeurs en icelle. / *Par feu Pierre Boistuau*〔sic〕, *surnommé Launay, / natif de Bretaigne*.
『キリスト教の普遍的（カトリック）教会の迫害の歴史　我らが救い主とその使徒から始まり、幾人ものローマ皇帝の専制下で抑圧され痛めつけられて、教会が耐えた見事な闘いの豊富な話と、教会におけるその後継者の括弧不動がどのようであったかを語る
ブルターニュ生まれのロネーこと、故ピエール・ボエスチュオーによる』。この書に含まれる特認は1572年１月８日付けである。私たちが参照するのは1576年刊のロベール・ル・マニエの版で、フランス国立図書館蔵でgallica上で公開されている電子テクストによる。以下日本語では『迫害の歴史』と略記し、この原典は*HPe*の略号を使用する。Pettegree, Walsby, Wilkinson, *Livres Vernaculaires français*, Brill, 2007,vol. I, p.172, p.173, p.174によれば、この書は1572年にロベール・ル・マニエ、ギヨーム・ド・ラ・ヌー、ヴァンサン・ノルマンから刊行され、1576年にもこの三者により再刊され、1586年にはギヨーム・ド・ラ・ヌーが再び刊行している。またWorld Catは1579年のヴァンサン・ノルマンのための版（マザリーヌ図書館蔵）を挙げている。

[2] Michel Simonin, <<Notes sur Pierre Boaistuau>>, dans *Bibliothèque d'Humanisme et Reanissance*, Tome XXXVIII, 1967, p.332.

[3] *HPe* f.3rº <<me fut par luy recommandé vn sien posthume, qu'il vouloit nommer les persecutions de l'Eglise militante, lequel par trop soudaine mort de son pere estoit demeuré manque & imparfaict d'vne partie de ses membres : & me pria & coniura par nostre amitié, de former & parfaire en luy ce qui restoit tronqué & mutilé, à fin qu'il ne vint en lumiere comme vn abortif & né auant terme>>

「しかし死を予告され、父の哀れな後見つき孤児として、論を友人の後見に委ねざるを得なかった。この友はロネー氏が不完全に残したものを完成させようとしたが、少し後に同じ死の道を辿った」[4]

つまり『迫害の歴史』はボエスチュオーの死によって、不完全なまま残され、それを友人のピエール・ド・シスチエールが補筆したが、この友人も間もなく死去したので、この作品は不備なところを残したまま印刷刊行された、と言うことであるらしい。

このような作品に対して、本論文では次の二つのことを検討していく。上記のような理由で、『迫害の歴史』のすべてをボエスチュオーが書いたとは言えない。そこで第一に、どの程度までこの作品がボエスチュオーの手になるかを、作品内部の指示を参照し、構成、書き方を考察することで、追求する。こうした研究を完全に行うためには、ボエスチュー自身の原稿などが発見されることが必要であろうが、現状ではそれは望むべくもないので、このような方法で、できるだけ接近を試みたい。

この作品を検討した論文は極僅かである。しかし最近刊行された、その数少ない論文でメニエル[5]もコルディネル[6]もこの作品の宗教的側面に焦点を当てている。それは当を得た方向であり、タイトルが表わすように宗教がこの作品の中心テーマであることは間違いない。そこで、私たちも、第二に、この作品でのボエスチュオーの宗教思想を追求しよう。

『迫害の歴史』はフランスにおいても広く読まれている作品とは言えず、ましてや日本ではほとんど知られていない。そこで上記の検討を行う前に、作品の梗概を述べておこう。

この作品の本論は三つの書からなっている。第一書は「教会の身体的苦しみと迫害」(f.10v°)が扱われ、イエス・キリスト以降の古代ローマ帝国における迫害の歴史を綴る。即ち第一章ではイエスの受難が、第二章では使徒の受難が扱われた後、第三章以下で、古代ローマ帝国におけるキリスト教徒の迫害が語られる。つまり第三章ではネロ帝治下の迫害、第四章ではトラヤヌス帝治下の迫害、第五章ではマルクス・アウレリウス帝治下の迫害、第六章ではセウェルス帝治下の迫害、第七章ではデキウス帝治下の迫害、第八章ではウァレリアヌス帝とアウレリアヌス帝治下の迫害、第九章ではディオクレティアヌス帝治下の迫害が語られ、紀元後一世紀か

---

[4] *HPe* f.5v°<<mais preuenu de la mort, il a esté contraint le laisser comme vn pauure pupille orphelin de son pere en la tutelle d'vn sien amy : lequel voulant parfaire en luy ce que le Sieur de Launay auoit laissé imparfaict, l'a suiuy peu apres au mesme chemin de la mort>>

[5] Bruno Méniel, <<L'*Histoire des persécutions* de Pierre Boaistuau et le genre de l'histoire ecclésiastique>> in *Pierre Boaistuau ou le génie des formes*, Grande et Méniel (sous la direction de), Classiques Garnier, 2021.

[6] Valerio Cordiner, <<" Les couronnes des roys tombent par terre". L'Église contre les tyrans dans L'*Histoire des persécutions* de Boaistuau>> in *Pierre Boaistuau ou le génie des formes*, Grande et Méniel (sous la direction de), Classiques Garnier, 2021.

ら四世紀初めまでのローマ皇帝による迫害が扱われている。その際それぞれの皇帝の事跡にも触れられ、殊にトラヤヌス帝やマルクス・アウレリウス帝の事跡には多くの頁が割かれる。

第二書は異端の歴史であり、迫害によってもキリスト教徒の数が減少しなかったのでサタンは次なる手段として異端を導入して神の言葉が堕落させられるように仕組んだと言う。第一章では「使徒言行録」二十章二九－三十節のパウロの「邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現われます」との言葉を筆頭に、古代教父たちの異端に対する言及が挙げられる。第二章以下で、それぞれの異端に言及され、第二章は父なる神を冒瀆する者、第三章は子イエスを冒瀆する者、第四章は聖霊を冒瀆する者、第五章は聖母マリア、使徒を冒瀆する者、第六章は預言者を冒瀆する者がそれぞれ扱われる。とりわけ三位一体の玄義に関わる第二章、第三章、第四章で多数の異端に言及される。つまり第二章では、魔術師シモン、マルキオン、神人同形論者、天父受難論者らの名が挙げられ、第三章では、エビオン派、ケリントゥス、ケルドン、マニ派、ウァレンティウス、アナバプチストなどに触れ、第四章では、マケドニウス、エウノミウス、モンタヌスなどが語られる。多くの場合それぞれの異端の説を簡単に述べ、それに反論している。

「教会の苦難の第三書」と題された第三部は以上の二書に比べると、論理の展開が明確ではない。神の教えを蔑ろにした者への報復と異端の二部分に分けられようか。即ち第一章から第三章は、旧約聖書により、神を敬う者を保護し助け、神に反抗した者を懲罰した歴史が語られる。第四章以下は異端に話題は移り、第四章では異端の存在が、第五章では異端の原因が述べられたあと、第六章からは異端への対処法が論じられ、次のような文を含む祈りで、この作品の本文は終る。

「私たちは御子我らが主イエス・キリストの名において私たちを聞き入れてくださるとの確かな確信をもって神に呼びかけるのを恐れず、次のように祈ろう。

永遠全能の主父なる神、憐れみに無限で、罪人の死を望まれず、むしろ悔悟を望まれる、あなたに、私たちは何よりも、私たちの罪と違反を忘れること、私たちの罪が愛される御子イエス・キリストの血に覆われ隠されるあるいはむしろ覆いつくされるようなされることがあなたの善意のお気にめすよう祈ります。」[7]

それではこの作品の真正さを検討しよう。まずは作品内部にある、問題解決のヒントとなる

---

[7] *HPe*, f.126rº–vº, <<Nous ne craindrons de nous adresser à luy, auec certaine asseurance qu'il nous exaucera au nom de son fils nostre Seigneur Iesus Christ, & le prierons ainsi :
SEIGNEVR Dieu pere eternel & tout-puissant, infiny en misericorde, qui ne desires la mort du pecheur, mais plustost sa repentance, nous te prions, auant toutes choses, qu'il plaise à ta bonté paternelle oublier nos fautes & transgressions, & faire que noz pechez soient couuertz & cachez ou plustost noyez au sang de Iesus Christ ton fils bien aymé.>>

文を見よう。三つの書の前に「この作品の概要」Argument de l'œuureという部分が置かれ、その中に次のような文がある。

「私たちは第一に、無限の様々な責苦で哀れな忠実なる者たちの身体を虐待するために、時に暴君を掻き立て、福音が人々を照らし、神の王国の栄光が進められることを妨げるために、サタンが引き起こし、私たちの時代にまで続いている恐ろしい嵐を取り扱うだろう。第二に私たちはサタンの巧緻を扱うだろう。サタンは、身体の責苦により、何も進めず、貴重な魂で天を見たすことしかなさなかったのを見て、身体より千倍も貴重な、神の子供らの魂がこの方法で、毒を塗られ、飲み込まれ、傷つけられ、罠に埋められるために、救い主の家族に、分裂、異端を導きいれて、姿を隠し始め、地下で蝕もうとした。」[8]

上記引用部分では「私たち」となっているが、この概要では「私」が語っているので、とりあえずボオエスチュオー自身がこの書の狙いを説明していると解してもよいだろう。こうして本論で扱われのは、第一に迫害の歴史であり、第二に異端の歴史であることが作者によって言明されている。この二つの部分は、先の梗概で述べたように、第一書と第二書に正確に対応する。

また第二書最後の第五章末尾には、次のような文も読まれる。

「ロネー殿はこの著作の第一書で、使徒たちの威厳、その使命をたっぷり扱っている」[9]

ここで言及された「この著作」は『迫害の歴史』以外には考えられらない。そしてボエスチュオーが自身を「ロネー殿」と呼ぶことは考えにくい。そうするとここで語っているのは作者ボエスチュオー以外の人物、多分補筆者ピエール・ド・シスチエールということになろう。従って、ここで補筆者が姿を現わしているからには、少なくとも、この指摘以降は補筆者の手が加わっている可能性が高いことが推定されよう。しかしなぜわざわざここでこのような第一書の一部に言及するのか。

それを考えるために第一書第二章の次のような興味深い事実を検討しよう。この章は使徒たちの闘いを扱い、まずパウロの場合を語るが、パウロの話が終ったところで、「第二章の終り」との文が挿入され、段落が終る。そして次の文は飾り大文字で始まり、「他の使徒たちがより

---

[8] *HPe*, f.7vº <<nous taicterons en premier lieu des orages terrribles que Sathan a suscité en L'Eglise primitiue & continué iusques à nostre siecle, pour empescher que L'Euangile n'esclairast aux hommes, & que la gloire du royaume de Dieu ne fust auancée, suscitant quelquefois des tyrans pour vexer les corps des pauures fidelles par vne infinité de diuers tourmens: Nous traicterons secondement de l'astuce de Sathan, lequel voyant que par les tourmens des corps il ne s'auançoit en rien, & qu'il ne faisoit autre chose que peupler les cieux d'vne infinité d'ames precieuses, il a commencé à se masquer, & a voulu myner par soubz terre, introduisant en la famille du Sauueur des scismes, & heresies, afin que les ames des enfans de Dieu, qui sont mille fois plus precieuses que les corps, fussent par ce moyen empoisonnées, englouties, abysmées, & enseuelies en ses laqs :>>

[9] *HPe*, f.97rº. <<Le Seigneur de Launay au premier liure de cest œuuvre traicte amplement de la dignité des Apostres, de leur vocation,>>

よい扱いを受けたのかを少し考えよう」[10] と続き、この後でペトロを始めとして、他の使徒たちの闘いが叙述される。 この書では全く異例のことであり、章の終りに「～章の終り」との文は一度も見られず、章の初め以外で飾り大文字が使われることも、この箇所以外にはない。この部分は全く例外的である。どうしてこのような例外的措置がとられたのか。奇妙な措置以下の内容と先ほどの第二書末尾の言及を比較してみれば、まさにたっぷり扱われている「使徒たちの威厳、その使命」こそが、第一書「第二章の終り」に続く部分であることが分る。そしてそれをわざわざ書くのは、この例外的措置を施された箇所が、実は後から追加されたものであることを示唆するのではないだろうか。

次にこの書の構成や書き方の点から、真正さを見てみよう。『迫害の歴史』は、本文中や欄外注に何度もその名が現われるエウセビオスの『教会史』に大枠を負っているように思われる。この三世紀の古代教父の著作は、イエス誕生から三世紀末のディオクレティアヌス帝の時代までの古代キリスト教会の歴史を扱い、ボエスチュオーの『迫害史』の内容と時代的に一致する。どの皇帝下で迫害が起きたのかも共通で、挙げられている異端も多くは同一である。また１６世紀に出版されたクロード・ド・セセルによるフランス語訳では『教会史』の内容は次のようだと述べられていた。

「聖使徒の継承と私たちの救い主から私たちの時代までにこれらの人が歩んだ時代を書こうとした。併せて教会の状態に関してなされたことと、様々な場所で、そして同じく輝かしい教会で、主宰した高位聖職者と注目すべき人物。同様に様々な時代に、その教義により、あるいは書物により、我らが信仰を堅固にし強めた人たち。同じく、どんな人が、どれほどの数、どんな時代に、イエス・キリストの子羊を狂った狼のように貪って、非常に争い、自分たちの意見を支えるために、私たちの宗教に反して偽りの幾つもの教義の作り手、頭となったかを書こうとした。」[11]

---

[10] *HPe*, f.19vº
<<*Fin du sencond chapitre*
COnsiderons vn peu si les autres Apostres ont reçeu meilleur traictement,>>

[11] *L'histoire Ecclesiastiqve transalatee de latin en Francois, par messire Claude de Seyssel, Euesque lors de Marseille : & depuis Archeuesque de Thurin* A Paris, Par Charles l'Angelier, en la grand' salle du Palais, au premier pillier. 1553. f.3rº <<VOVLANT escrire les Sucessions des sainctz apostres, & le temps qu'ilz ont couru depuis nostre saulueur, iusques à nous : ensembles les choses qui ont esté faictes iceulx touchant l'estat de l'eglise, les prelatz & notables personnages qui ont presidé en diuers lieux. Et mesmement aux eglises insignes. Semblablement ceulx qui en diuers temps ont confermé & fortifié nostre foy par leur doctrine, ou par leurs escriptz. Et pareillement quelles gens, en quel nombre, & en quel temps se sont faictz Auteurs & chiefz de plusieurs doctrines faulses & contre nostre religion, pour vouloir trop contendre, & soustenisr leurs opinions, en deuorant comme loups enragez les brebis de Iesus Christ.>>大英図書館蔵でgoogle上で公開されている電子テクストによる。エウセビオスの原文ギリシア語のこの書は、15世紀末からラテン語訳が出版されいて、1533年にはGaufridus Boussardusによるラテン語訳も現れた。なお、この『教会史』については、ギリシア語原典からの秦剛平による日本語訳（『教会史』（上）（下）講談社学術文庫、2010）を参照している。

このフランス語訳はギリシア語原典からはかなりずれていると思われるが、それでもこの書が、教会に生じたことと教会を荷った人々の歴史、迫害史、異端史を書いたと述べていることは確かである。こうした項目のうちボエスチュオーの『迫害の歴史』は迫害史と異端史を受け継ぎ、第一書では迫害史をエウセビオスの書と同じく年代順に語り、そこに皇帝の事跡を付け加えた。第二書では、異端を時代順ではなく、冒瀆の対象に従って述べ、エウセビオスの内容を構成し直している。

次に『迫害の歴史』の書き方を見てみよう。ボエスチュオーはエウセビオスから内容を借りるだけではなく、時にはそのフランス語訳の文をそのまま引き写している。

例えば第一書では、以下のようにエウセビオスを繰り返すのが適当であるとして、その後に迫害下でのオリゲネスの様子を述べる。

<<il me semble bien conuenable en ce lieu de repeter les propos memorables d'Eusebe, lequel parlant de l'ardeur & constance merueilleuse de ce ieune enfant Origene, escrit de luy ce qui s'ensuit. La dixiesme année de l'Empire de Seuerus la persecution fut susucitée tres-apre & tres-cruelle en la cité d'Alexandrie, au moyen de laquelle plusieurs bons champions gaignerent le pris, & le loyer du sainct martire, duquel Origene estant encore ieune enfant fut si conuoiteux & la desiroit de si ardent courage qu'il alloit de son gré cherchant les moyens pour y paruenir : & quand il voyoit les autres au combat de la foy és lieux publicques, il se venoit deuant tout le monde presenter & ingerer pour leur tenir compagnie, comme s'il eust contemné la mort & l'eust voulu prendre à force, mesme baisoit lesdicts martis prenant le dernier congé d'eux en la presence des iuges. Enfans que sa mere luy desroba tous ses accoustremens la nuict, ainsi qu'il dormoit en sa chambre, il estoit si animé & affecté au martire qu'il vouloit aller accompaigner son pere Leonide en la prison & au martire. Et se voyant par l'artifice de sa mere priué de son esperance, il entreprist vne chose plus grande que sa iuenesse ne portoit : car il escriuit vne lettre à son pere où il l'exhortoit à patiemment supporter le martyre, adioustant ces parolles pour la fin. Gardez vous mon pere que l'affection que vous portez à moy & à mes freres ne vous face changer de propos.>>[12]
（下線は論者、以下同様）

---

[12] *HPe* f.53r°-54r°.「この場でエウセビオスの記憶されるべき言葉を繰り返すのが相応しいと私には思われる。エウセビオスは幼年時代のオリゲネスの驚くべき熱意と毅然を語り、次のように書く。セウェルスの帝国の第10年、迫害はアレクサンドリアの町で非常に激しく、残酷だったので、幾人もの善良な擁護者が聖なる殉教者の賞と報酬を得、オリゲネスはまだ幼い子供であったが、非常に熱い心で欲しがり望み、そこに達する方法を好んで探しに行った。公の場所で他の人が闘っているのを見たとき、オリゲネスはその仲間になりたいためにみんなの前に現われ口出しに来て、死刑を宣告され死刑を力ずくで掴まえたいかのようで、裁判官の前で最後の別れをしてその殉教者たちに口づけさえした。そして、部屋で寝ていて、母が夜に服を奪わなかったら、殉教にとても駆り立てられ心動かされて、父レオニドゥスに牢獄と殉教に同行したがった。そして母の巧妙なやり方で希望を奪われ、オリゲネスはその若さが荷うよりも大きなことを企てた。というのも父に手紙を書き、そこで父に辛抱強く殉教に耐えるよう勧め、最後に次の言葉を付け加えた。父よ、私と兄弟に寄せる愛情が言葉を変えないようにしてください。」

この箇所を次の、エウセビオスのセセルによるフランス語訳の文と比べれば、ボエスチュオーがかなりの部分をそのまま取っていることが分るだろう。

<<La dixiesme annee adonc de l'empire de Seuerus, en laquelle Letus estoit president pour luy en Alexandrie, & en tout le pais d'Egypte, & que Demetrius estoit euesqeu d'Alexandrie, apres la mort de Iulian, fut la persecution suscitee tresapre & trescruelle en la cité d'Alexandrie, au moyen de laquelle plusieurs bons champions gaignerent le pris & le loyer du sainct martire, duquel Origene, estant encores bien ieune gars, fut si couuoiteux, & de si ardant courage la desiroit, qu'il alloit à son gré cerchant les moyens pour y paruenir. Et quand il veoit les autres au combat de la foy es lieux publicz, se venoit deuant tout le monde ingerer & presenter pour leur tenir compaignie, comme s'il presumoit la mort, & la vouloit prendre à force, laquelle sans point de faulte, il eut acquise n'eut esté que Dieu pour le bien vniuersel de toute l'eglise（comme il est à croire）le perserua par la solitude & diligence toutesfois de sa mere, laquelle par diuers moyens empescha d'accomplir son desir. Car voyant que par prieres, par larmes & remonstrances piteuses, elle ne le pouot retirer : ains de plus ne plus le veoit ardant & animé au martire, mesmement durant la prinse de son pere, & qu'il vouloit à toute force luy aller tenir compaignie en la prison, & au martire : Elle vsa d'vne cautelle procedante d'vn amour maternel : car entendant vn soir que le lendemain auant qu'il fut iour, s'en vouloit sortir à l'emblee, de la maison, & apres aller presenter au lieu du martire, elle entra la nuict ainsi qu'il dormoit dedans sa chambre, & luy print & embla tous ses habillemens, sans lesquelz n'eut peu sortir de la maison. Et non pourtant voyant qu'il estoit contrainct de demourer, par l'empeschement de sa mere, entreprint vne chose plus grande que son aage ne portoit. Car il escriuit vnes lettres à son pere, par lesquelles luy signifioit qu'il estoti detenu & empesché par sa mere, de ne luy pouoir aller tenir compaignie. Et neantmoins l'enhortoit qu'il deut estre constant, ainsi qu'il auoit commencé, en adioustant encores ces parolles. Garde, mon pere, que pour nous autres tu ne changes de propos.>>[13]

皇帝の事跡に関しては、エウセビオスの書はごく簡潔にしか記していない。そこでボエスチュオーは他の著作家から情報を得ている。ネロ帝に関するタキトゥスであったり、全般にわたるパウルス・オロシウスであったりするが、特に顕著に依拠しているのはアントニオ・デ・ゲバラの著作である。

例えばトラヤヌス帝の衡平さを語る次の部分を見てみよう。

<<Il estoit si grand iusticier que tout le temps qu'il fut à Rome il ne faillit à estre deux foys la sepmaine au consistoire des causes pour rendre le droict de Iustice à vn chascun, & mesmes estant en quelquefoys à cheual: & acheminé pour aller à la seconde guerre contre les Daces, vint vne pauure femme au deuant de luy qui luy dist, Empereur Trajan ie suis vne pauure vieille & veufue , qui me plains

[13] *Op.cit.*, f.90v°–91r°

à toy de ce que ie n'ay de toute ma posterité qu'vne fille qu'vn de tes domestiques a violée: A laquelle il fist reponse, Mamie ie te prie ne me sois importune pour ceste heure, considere comme ie suis à cheual auec mon camp qui marche pour aller à mon voyage: mais ie te iure les dieux immortelz qu'à mon retour ie te feray bonne & briefue iustice. Helas Seigneur（repliqua la femme）quelle asseurenace as tu de reuneir, veu que l'expedition de la guerre est doubteuse ? Lors Traian esmeu tout à vn coup d'vne si prompte reponse, mist pied à terre & differe son departement iusques à ce que la pauure femme fust satisfaicte & le rauisseur puny.>>[14]

この部分はゲバラの古代皇帝を扱った書物のアントワーヌ・アレグレによるフランス語訳に基づき、同書では以下のようである。

<<Estant Traian à cheual, & acheminé pour aller à la seconde guerre contre les Daces, ueint une poure femme à son deuant, & luy dict : Sire Empreur, Ie suis pourette, uefue, & uieille, & me plians à toy mon souuerain seigneur, de ce que ie n'ay de toute ma postetité qu'une fille, que i'ayme singulierement, qu'un de tes domestiques a uiolee. A laquelle Traian feit response, M'amye, ie te prie ne me sois importune pour ceste heure, & considere, que suis desia à cheual pour aller en voyage : mais ie te iure les Dieux immortelz, qu'à mon retour ie te feray faire bonne & briefue iustice. Helas seigneur, replica la femme, quelle asseurance as tu de reuenir de expedition si doubteuse, comme est la guerre ? Lors Traian esmeu, tout à coup, & de la bonne response, & de pitié, meit pied à terre, & differa son departement, iusques à ce que la poure femme fut satisfaicte, & le rauisseur puny.>>[15]

先ほどのエウセビオスの場合と同様にここでもアレグレのフランス語訳をほぼそのまま引き写している。トラヤヌス帝の挿話については、神の正義の魁（<<auant-coureux de la iustice de Dieu>>、f.32vº）の一つとされる、アンティオキアで起きた地震とそれに引き続く驚異でも、同様にゲバラのフランス語訳を引き写し[16]、しかし興味深い変更があるのだが、この論では触

---

[14] *HPe*, f.28vº.「トラヤヌス帝は大変な裁き手で、ローマにいるときはいつも、各人に正しい裁判を下すために、週に二回裁判会議に出るのを欠かさず、ときには馬上でさえそうであった。それでダキア人に対する二度目の戦争に行くために進んでいると、貧しい女が面前に出てきて、帝に言った。『トラヤヌス皇帝、私は貧しい老女で寡婦です。あなた様に不平を訴えに来ましたが、私には子孫が娘一人しかおりませぬが、その娘をあなた様の召使の一人が陵辱いたしました。』それに皇帝は答える。『老女よ、今は邪魔をしないでもらいたい。旅に行くために進軍している部隊と馬に乗っているのを考えよ。しかし不死の神々にかけて、戻れば、すぐに正義をおこなうことを誓おう。』『ああ皇帝陛下』とこの女は答える『戻って来るどんな保証がおありなのですか。戦争の遠征は不確かなのですから。』そのときトラヤヌスは素早い返答に心動かされ、地面に降り、この貧しい女が満足し、暴行者が罰せられるまで、出発を延期する。」

[15] *Decade, contenant les vies des Emperurs,（...）, Extraictes de plusieurs autheurs, Grecs, Latin, & Espagnols, & mises en François par Antoine Allegre.*（...） Vascosan, 1556, f.14vº.オルレアン市立図書館蔵でBibliothèques Virtuelles humanistesで公開されている電子テクストによる。このゲバラの書は、トラヤヌス帝についてはディオン・カッシウスが原典であるが、主としてプルタルコスなどを典拠としているようである。Cf. Paul Chavy, *Traducteur d'Autrefois Moyen Âge et Renaissance*, Champion-Slatkine, 1988, I, p.659.

[16] *HPe*, f.33rº- f.34vº ;*Decade, contenant les vies des Emperurs,（...）, Extraictes de plusieurs autheurs, Grecs, Latin, & Espagnols, & mises en François par Antoine Allegre.*（...） Vascosan, 1556, f.24rº-25rº.

れる紙幅の余裕がない。

もう一つだけ第五章のマルクス・アウレリウス帝の場合を見ておこう。この優れた皇帝については生涯の最も目覚しいことが語られた後、それでもやはり行った迫害に言及される。その事跡のうちでローマ帝国に敗れ都市ローマで引き立てられる捕虜を前にして、皇帝は次のような言葉を発する。

<<Quelle plus grande folie ou vanité peut estre à vn capitaine Romain que de triompher ainsi ? Et par ce qu'il a conquesté force villes, alteré les pacifiiques, destruict les citez, razé les forteresses, desrobé les pauures, enrichy les tyrans, espandu beaucoup de sang, fait vne infinité de veufues & orphlins, & en payment de tout ce dommage on le reçoit auec triomphe & magnificence : Plusieurs y sont morts, beaucoup ont trauaillé, & vn seul en remporte la gloire. Puis disoit ce grand Empereur Marc Aurele, par les Dieux immortels quand on me conduisoit à Rome au chariot de triomphe, & ie voyoit les pauures captifs enferrez, i'entendoit les lamentations des veufues, ie voyois vne infinité de thesors mal gaignez, ie me recordois des morts ; si ie me resiouissoit en public, ie pleuurois gouttes de sang en secret, & commençois à m'escrier contre Rome, disant ainsi. Viença Rome,pourquoy t'esiouys-tu de l'infortune d'autruy ? es tu plus antique que Babilone ? plus belle que Helie ? plus riche que Carthage ? plus forte que Troye ? plus peuplée que Thebes ? plus enuironnée de nauires que Corinthe ? plus delicieuse que Thire ? plus heureuse que Numancie ? qui toutes sont peries, vestues de tant de vertuz, & gardées de tant de vertueux : & tu esperes demeurer perpetuellemnt fourrée de tant de vices, & peuplée de tant de vitieux ? Croy vne chose pour certain, que la gloire qui est à ceste heure de toy a esté premierement d'elles, & la destruction qui est à ceste heure d'elles sera puis apres de toy.>> [17]

この文を次のゲバラの書のフランス語訳と比べてみれば、やはりここでもボエスチュオーが引き写していることが分る。

<<Quelle plus grand ny egale legereté peult estre que à vn Capitaine Romain pource quil ha conquesté

---

[17] *HPe*, f.38v°-39r°「このように凱旋式を挙げることよりローマの隊長にとってどんな大きな狂気あるいは虚栄があるのか。多くの都市を征服し、平和を改変し、町々を破壊し、城塞を取り払い、貧しい人を盗み、暴君を豊かにし、多くの血を流させ、無数の寡婦と孤児を作ったことで、この損害の払いに凱旋式と壮麗さで受け取る。幾人もがそこで死に、多くが苦しみ、一人だけが栄光を持ち帰る。次いでこの偉大な皇帝マルクス・アウレリウスは言った。不死の神々により凱旋車で私をローマに導くとき、私は哀れな捕虜が鎖に繋がれているのを見、寡婦の嘆きを聞き、無数の財宝が不当に得られたのを見、死者を思い出す。公に私が喜ぶなら、密かに血の雫を泣き、次のように言って、ローマに対して叫び始めるだろう。さあローマよ、なぜおまえは他の不幸を喜ぶのか。おまえはバビロンより古いのか。エリエより美しいのか。カルタゴより豊かなのか、トロイアより強いのか、テーバイより人口が多いのか、コリントより多くの舟で囲まれているのか。チールより甘美なのか。ヌマンシアより幸運なのか。これらすべては滅び、多くの美徳を纏い、多くの美徳の人に守られていた。そしておまえは多くの悪徳で永遠に詰め込まれたままで、多くの悪徳の人で満たされ続けるのを望むのか。一つ確かだと思え。今おまえのものである栄光は初めはこれらのものであり、かつてこれらのものであった破壊は次におまえのものであろうことを。」

les Royaumes, alteré les pacifiques, drestruict les citez, rasé les forteresse, desrobé les poures, & enrichy les tyrans, espandu beaucoup de sang, faict infinité de vefues ? Et en payment de tout ce dommage le reçoit Romme auec grand triumphe. Veux tu donc plus grande folie ? Les vns sont mors infinis en la guerre, & vn seul en emporte la gloire. Et encores que icuex miserables nayent merité pour leurs corps auoir sepulture, ie men alloys par les places de Romme en triumphe. Par les Dieux immortelz ie te iure, & soit cecy secret entre toy & moy, que quand ou des que le chariot triumphal venoit les malheureurx prisonniers chargez de fer, & ie contemploys infinis tresors estre mal gaignez. Ie oyiois les lamentations & soucy des vefues plorantes pour leurs marys,& ie me recordois de tant damy questoyent mors, que si ie me resiouyssois en public, ie ploroys gouttes de sang en secret. Ie ne sçay quel est lhomme qui du dommage dautruy prend propre plaisir. Et en ce cas ie ne loue les Assyriens, ny ay enuie à ceux de Perse, ny me satisfont les Lacedemoniens, ny appreuue les Chaldiens, ny me contentent les Grecz. Ie maudictz les Troyens, & condamne ceux de Carthage, par ce que non auec le zele de Iustice, sinon auec rage dorgueil en leurs temps à eux & à leurs Royaumes donnerent scandale, & à nous autres occasion de nous perdre. O Romme mauldicte, mauldicte as esté, & seras mauldicte. Car si les destinees fatales ne me mentent, & lentendement ne me trompe, & fortune ne fiche le clou, verra lon de Romme au temps aduenir ce que nous voyons à ceste heure des Royaumes passez, & est que comme auec tyrannie tu t'es faicte Dame des Seigneurs, auec Iustice te retourneront serue des serfz. O mal fortune Romme ie te retourne à dire, pour ce que tu es aujourdhuy tant chere du vertu, & fais si bon marché de folie, par aduenture tu es plus antique que Babylone, plus belle que Helye, plus riche que Carthage, plus forte que Troye, plus peuplee que Thebes, plus enuironnee de naufz que Corinthe, plus peuplee de tours que Capue, plus delicieuse que Thyrre, plus inepugnable que Aquilce, plus heureuse que Numance ? Nous voyons que toutes sont peries vestues de tant de vertus, & gardees de tant de vertueux : & esperes demourer perpetuellement fouree & pleine de vices, & peuplee de tant de vitieux ? Tiens vne chose certaine, que la gloire qui est à ceste heure de toy a esté premierement delles, & la destruction quest à ceste heure delles sera en apres de toy.>>[18]

長い引用になって恐縮だが、ボエスチュオーがどのようにして第一書を書いたか、十分理解することができるだろう。つまり、キリスト教徒の迫害に関しては、エウセビオスに基づき、時にそのフランス語訳から引き写すことも行っている。ここでは言及しなかったが、さらにニケフォロスの『教会史』から補うこともしている。皇帝の事跡は、様々な作家のものを利用す

[18] *Le livre de Marc Aurele Empereur et eloquent orateur, traduit de vulagaire Castillan en François, par R.B. de la Grise,* Lyon, Jean de Tourne, 1544, p.311-313.フランス国立図書館蔵でgalliaで公開されている電子テクストによる。 なおボエスチュオーはこの部分を大変気に入り、『ケリドニウス・チグリヌスの物語』と『世界劇場』で取り上げていた。*L'hisoire de Chelidonius Tigirinus,* Pour Vincent Sertenas, 1559, f.122r°v° ; *Le Théâtre du Monde,* Droz, 1981, p.134-135

るが、特にゲバラの著作に多くを負い、これまた時にはそのフランス語訳を引き写すこともする。このような書き方を私たちは以前「パッチワーク」と形容したが、『ケリドニオス・チグリヌスの物語』から『驚異の物語集』まで、ボエスチュオーのほぼすべての作品で実行された、やり方である。『迫害の歴史』でもこの書き方を踏襲し、特に皇帝の事跡に関しては、印象深い場面を巧みに取り入れ、読者を引きつけると同時に、トラヤヌス帝を襲ったアンティオキアの地震をキリスト教徒に対する迫害の報いとするなど、物語の展開にうまくはめ込んでいる。

第二書は異端の歴史であるだけに、こうした方法はあまり目立たない。しかしやはり同様の書き方になっている。

この第二書においては、ベースとなるのは聖書とエウセビオスの『教会史』であり、取り上げられる異端の多くは、エウセビオスの書でその名が挙げられていた。そして異端の説を述べる際も、この書に依っている。例えばマルキオンについては『迫害の歴史』は次のように語る。

<<Marcion,（...）a nié le createur du ciel & de la terre estre Dieu, & dit qu'il y a vn autre Dieu outre le grand createur de l'vniuers. Iustin le martir en sa seconde apologie se lamente bien fort de ce que Marcion a esté cause que plusieurs ont blasphemé & nié que Dieu fust createur de toutes choses. >>[19]

この説明は、次のように、エウセビオスの書のフランス語訳が与えるものと、殉教者ユスティヌスへの言及も含めて、類似している。

<<Et Iustin au liure que il a faict contre Marcion, l'a tresbien declairé, disant que iamais il ne croiroit à nostre seigneur, sil disoit qu'il y eust vn autre Dieu que le createur de toutes choses.>>[20]

こうして異端の説の説明も多くの場合は、エウセビオスの行うものとほぼ一致する。しかし中にはエウセビオスには異端の説が紹介されない時もあり、そのような場合ボエスチュオーは別の典拠を求める。アペレスの場合を見てみよう。アペレスの異端説は次のように述べられる。

<<Appelles（comme sainct Augusutin & Philaster afferment）disoit que Iesus Christ n'auoit prins sa chair humaine de la Vierge : mais que descendant du ciel il s'estoit formé vne chair de la substance de l'air ou des estoilles, laquelle il auoit renduë aux elemens apres sa resurrection, & ainsi il esoit monté au ciel sans chair.>>[21]

ここでは本文にも聖アウグスティヌスの名が挙げられているが、同頁の右の欄外注には<<S. Augustin au liure des heresies, chapit. 21>>とある。これはアウグスティヌスがカルタゴの助祭コドウルトデウスなるものに宛てた書簡の末尾に付された「異端のリスト」を指し、果たしてそ

---

[19] *HPe*, f.81vº.「マルキオンは、（...）天と地の創造者が神であることを否定し、宇宙の偉大な創造者のほかにもう一人の神がいると言った。殉教者ユスティヌスは第二弁証論でマルキオンが幾人もが神がすべての物事の創造者であることを冒瀆し否定することを引き起こしたと強く嘆く。」

[20] *Op.cit.*, f.65rº.

[21] *HPe*, f.90rº.「アペレスは（聖アウグスティヌスとフィラステルが断言したように）、イエス・キリストは処女からその肉を得たのではなく、天から降りてきて、空気あるいは星辰の物質でその肉を形成し、蘇りの後に要素に返し、こうして肉なしで天に登ったと言っていた。」

のリストの23番目には次のような説明がある。

<<Hunc Apellem dicunt quidam etiam de Christo tam falsa sentisse, ut diceret eum, non quidem carnem deposuisse de cælo, sed ex elementis mundi accepisse, quam mundo reddidit, cum sine carne resurgens ascedit in cælum.>>[22]

こうしてボエスチュオーは、神人同形論者Antropomorphites、天父受難論者Patripassiens[23] などエウセビオスでは欠ける異端の説を、このアウグスティヌスの「異端リスト」で補うのである。

第二書は題材が題材であるだけに、宗教書以外の著作にはほとんど言及せず、引用もほぼない。しかし神の観念が言葉で言い表し難いことを論じる部分には、プラトンやアリストテレスへの言及があり、次のようにキケロの『神々の本性について』の一節をかなり正確なフランス語訳で引用している。

<< Si tu me demandes que c'est que de Dieu, ou quelle　chose il est, ie prendray Simonides pour autheur, lequel estant interrogé par le tyran Hiero, que c'estoit que de Dieu, luy demande vn iour de delay pour y penser. En luy ayant faict la mesme demande le iour soubsequent luy requist qu'il luy donnast encores deux iours, lesquels expirez l'interrogea de rechef, auquel il demanda encores nouueau delay, dequoy le tyran esmerueillé luy demanda pourquoy il vsoit de tant d'eschapatoires & dilations : parce（dist Simonides）que de tant plus ie considere profondement la chose, elle me semble plus difficile & obscure. Par ainsi que nul ne s'attnde de trouuer certain vocable ou diffinition par laquelle il manifeste & rende la nature de Dieu comprehensible.>>[24]

---

[22] *Œuvres complètes de saint Augustin*, Tome vingt –cinquième, Paris, Louis Vivès, 1870, p.221「ある者たちの言うには、このアペレスはキリストについて大変誤って考え、キリストの肉について天から降ろされたのではなく、世界の要素から受け、それを肉なしで天に登られるとき、世界に返されると言った。」

[23] それぞれアウグスティヌスのリストのLとXLI。なおボエスチュオーがプネウマトマキPneumatomachi（f.94rº）と呼ぶのは、アウグスティヌスのリストのLIIプネウマトマクスpneumatomakous（原文ギリシア語）のことだと思われる。

[24] *HPe*, f.79rº. ラテン語原文及び日本語訳は以下の通り。<<Roges me quid aut quale sit deus, auctore utar Simonide, de quo cum quaesivisset hoc idem tyrannus Hiero, deliberandi sibi unum diem postulavit ; cum idem ex eo postridie quaereret, biduum petivit ; cum saepius duplicaret numerum dierum admiransque Hiero requireret cur ita faceret, 'Quia quanto diutius considero', inquit, 'tanto mihi res videtur obscurior.' Sed Simoniden arbitror (non enim poeta solum suavis verum etiam ceteroqui doctus sapiensque traditur) quia multa venirent in mentem acuta atque subtilia, dubitantem quid eorum esset verissimum desperasse omnem veritatem.>> Cicero, *De natura deorum Academica* , Harvard U. P., 1967, Loeb classical library, I.22, p.58. キケロ『神々の本性について』Ⅰ.60「だが、あなたは、神とは何か、神とはいかなるものかを問うている。そこでわたしは詩人シモーニデースの助けを借りることにしよう。彼は僭主ヒエローンから同じ問いを受けたとき、答えを考えるために一日の猶予を請うた。ヒエローンが翌日同じ問いを繰り返すと、さらに二日の猶予を求めた。こうして彼が日数を倍ごとのばしていくので、不審に思ったヒエローンは、どうしてそのような答え方をするのかと尋ねた。すると、シモーニデースは、「考えれば考えるほど、わたしにはこの問題が謎めいたものに見えてくるからです」と答えたという。思うに、シモーニデースは－彼は魅力的な詩人であったばかりか、一方では学識豊かな賢者であったと伝えられる－、心の中に多くの明敏で妙なる観念が浮んだために、そのうちで何がもっとも真実に近いのか確信がもてずにいたのであり、そのため真実を語ることに絶望したのだと思われる。」『キケロ選集』、11、山下太郎訳、岩波書店、2000、44頁。

このように話題の制約があるものの、第二書においても、他の作者の著作を参照し、時にはその表現をほぼ踏襲する書き方を、実践している。

しかし第三書には、アルキビアデスのシレーノスなどへのごく短い言及はあっても、聖書以外への言及、引用は、まずなく、書き方が第一書第二書とは異なっている。

第三書と最初の二書との区別には、また別の理由も挙げられる。第三書はもっぱら論争的な性格もあってか、文体が最初の二書とはかなり異なっている。例えば、要約して結論づけるsommeが前置詞なしで単独で五回（f.106r°, 113v°,115v°, 124v°, f.104v° somme que）使用されているが、第一書では一回（f.63r°）しかなく、第二書ではen somme que（f.84v°）しか現われない。また動詞permettreの後に名詞＋前置詞なしの不定詞がくる構文が、<<Dieu permette les siens estre de toutes partz affligez>>（f.107r°）など計四例存在する（f.113v°,f. 117v°, f.123v°）が、このラテン語の対格不定詞構文を受け継いだ構文は、第一書第二書にはなく、permettre＋前置詞なしの不定詞構文として第一書に一箇所<<la main du Seigneur, qui ne permet jamais affliger l'innnocent>>（f.26v°）があるだけである。またEt ceの語句も<<& ce par le moyen de ... >>（f.123v°）<< & ce pour n'auoir tenu compte>>（f.114r°）と第三書で二回使われるだけである。こうした第三書の文体的特徴は、前二書と第三書の作者が異なることをまた示唆するものであろう。

さらに第三書には綴りの過ちも目立ち、àとaの混同（<<le Seigneu à assemblé >>（f.124v°），<<les assautz que l'Eglise à receuz>>（f.107r°））、laとl'aの取り違え（<<quand il la retirée>>（f.100v°），<<qui（...）la sauuée de si grosse & horribles tempestes>>（f.105v°））などに加えて<<qu'il portent（f.119°）>>のような例も見られ、補筆者も死亡し、テクストが不完全に残されたとの出版者の言を裏付けているのだろう。

以上見てきたような、「作品の概要」における指摘、エウセビオスの『教会史』から借りてきた構成、他の作家から内容を借り、また時には引き写す書き方、さらには第三書における文体の特異性、これらはみな第一書第二書と第三書の書き手が異なることを示していよう。即ち第一書の一部を除いて、前二書はボエスチュオーの手になるものであろうが、第三書はボエスチュオーの草稿に手を入れた、あるいは補筆者が書き加えたものと見なしても間違いではあるまい。この結果に基づいて、次に第一書第二書でボエスチュオーの宗教的思想を検討しよう。

まずは第一書について見よう。この書ではローマの何人かの皇帝下でのキリスト教徒の迫害が語られる。多くの信者がキリスト教を保持して殉教したと記述されるものの、この人たちがどのような信仰を持っていたかは述べられない。しかし細部を注意深く見ればそこにボエスチュオーの宗教思想の特徴が窺われる。例えば第一章末でイエスの最後の状況を次のように描いている。

「というのも、絞首台に登らされ、死の苦悶がすぐ近くだと感じ、肉を釘に貫かれ、頭に鋭い茨を被らされ、憐憫の針はこのような攻撃を加えたので、一つ一つの苦悶を忘れ、人間に寄

せる友愛の心は燃え立ち、父に語りかけて、言われた。『私の苦労と涙の、この木に釘付けされて、私が苦しむ受難の、世界をあなたと和解させた報いの永遠の父よ、私はあなたがこの惨めな人々を許されること以外何も望みません。私自身の血により、この人たちの罪が赦され、私の死の苦しみでこの者たちが生き続けるために。』」[25]

聖書にはイエスのこのような言葉はそのままでは何処にも見出されない。「ルカによる福音書」二三章三四節「そのとき、イエスは言われた。『父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。』」[26] や「ローマの信徒への手紙」三章二五節「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となされました」、「コリントの信徒への手紙　二」五章一九節「つまり、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ」、「コロサイの信徒への手紙」一章二十節「その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました」などを組み合わせたのだろうか。ともかくボオエスチュオーが典拠も明らかにせずに作り上げたのは、神と人の和解者、自らの血で人間の罪を贖うイエスの姿である。またこのイエスは「肉によれば、この方はダビデの血統である」[27] と言われており、人性を纏った存在でもある。

次に第一書の最後の章第九章での記述を検討しよう。この章ではディオクレティアヌス帝治下での激しい迫害が、エウセビオスに基づいて、詳しく語られれるが、ボエスチュオーはその中にニケフォロスの『教会史』からとった挿話を挿入し、次のように記す。

「ニケフォロス・カリストゥスは第七書第一六章で、私たちの人々が暴君の激しい怒りに抵抗するのに持った毅然の驚くべき物語を語る。クリスマスの祝いにキリスト教徒は周りの場所からある神殿に集まり、老いも若きも、娘も女も、そこで祝っていた。この集まりを知らされた暴君は神殿を閉めさせ、木で囲い、次いで魁を派遣して、神殿の扉で、出てきてこの場の近くにある祭壇でユピテルに犠牲を捧げたい者は命を助ける、と叫ばせた。拒んだ者たちはすぐにその中で燃やされると確信する。叫びを聞き、みんなのために代表したその中の一人は、自分たちはみなキリスト教徒で、父と子と聖霊以外の神を知らない、その神にその名の証言として自分たちの命を捧げるだろう、そして暴君は望むときに火をつけさせる、と答える。すぐに

---

[25] *HPe*, f.14r°–v°.<<car estant esleué au gibet, & sentant les angoisses de la mort bien proches, ayant sa chair percée de cloux, & son chef couronnée de poigantes espines, l'aiguillon de pitié luy donna vn tel assaut que oubliant toutes les particulieres afflictions, ayant le cœut tout embrasé de l'amitié qu'il portoit à l'homme, s'adressant à son pere il luy dit : O pere etrenel en récompnce de mes peines & larmes, & de ceste passion que ie souffre, estant cloué en cest arbre, en recompense d'auoir reconcilié le monde auec toy, ie ne veux autre chose sinon que tu pardonne à ce miserable peuple, afin qu'auec mon propre sang leur coulpe sont soudée, & que par le tourment de ma mort ils demeurent viuifiez.>>

[26]「聖書」の日本語訳はことわりのない限り次の版による。『聖書　旧約聖書続編つき　ハンディバイブル』　新共同訳　日本聖書協会　1995。

[27] *HPe*, f.12v°–13r.°<<selon la chair il fust yssu de la lignée Royale de Dauid>>

火はつけられ、燃やされた神殿は中にいた一万五千あるいは二万人と共に灰燼に帰した。」[28]

実際ニケフォロスは『教会史』の当該箇所で、このクリスマスの大迫害を記しているが、キリスト者の代表者の言葉は、少し異なり、次のようである。

「私たちは皆キリスト教徒で、キリストは唯一の神、王であると信じます。そしてその方と、父と、聖霊に犠牲を捧げ、私たちは皆一つの命を提供する覚悟がたやすくできている。」[29]

ニケフォロスにも父とキリストと聖霊の名は出ているが、ボエスチュオーはその三者以外の神を知らないとすることで、三位一体をより強調している。

第一書はローマ皇帝のキリスト教徒迫害を語る。そしてこれら皇帝はみな非業の死を遂げる。つまりこうした悪を行った結果として神の懲罰が降ると言うわけだ。しかしその死の状況の描写は、人糞塗れの洞窟で自決したネロや、サポル王の乗馬の際の踏み台となったウァレリアヌス帝などを別として、あまり詳細でも悲惨でもなく、報復の神の姿はそれほど強調されてはいない。

第二書は異端を扱い、この異端との対比で作者の宗教思想があぶりだされる。もっとも、取り扱われる異端は、エウセビオスの『教会史』にあわせて古代の異端が大部分を占める。古代の異端思想はいわばすでに決着済みであるから、以下では同時代の異端として唯一挙げられた再洗礼主義者アナバプチストに焦点を当てて検討しよう。

第二書は神、イエス、聖霊を冒瀆した者が章ごとに取り上げられる。その中でイエスを冒瀆した者として再洗礼主義者が現われるのは奇異に思われる。「黙れ。数年前、アナバプチストは、1400年以上前に、教会全体で拒まれ、破門制裁にされたこの誤りを呼び覚まそうとした。」[30]と主張されても、再洗礼主義の根本主張、幼児洗礼の否定とは結びつきにくい。そこでここで

---

[28] *HPe,* f.67v°–68r° :<<Nicephore Caliste liure septiesme chapitre sixiesme racompte vne histoire esmerueillable de la constance qu'auoient nos gens à resister à la rage des tyrans. Il escrit qu'à la feste de Noël les Chrestiens s'estoient assemblez de tous les lieux circonuoisins en vn temple, ieunes & vieux, filles, & femmes pour y celebrer la feste : les tyrans aduertis de ceste assemblée firent fermer le temple & l'enuironner de bois, puis enuoierent vn heraut crier à la porte du temple que ceux qui voudroient sortir & sacrifier à Iupiter à l'autel qui estoit pres de ce lieu qu'il leur estoit permis de sauuer leur vie. Ceux qui refuseroient qu'ils s'sseurassent d'estre à l'instant tous bruslez là dedans. Le cry entendu l'vn d'eux delegué pour tous repondit, qu'ils estoient tous Chrestiens & qu'ils ne cognoissoient autre Dieu que le Pere, le Fils, & son S. Esprit, auquel ils offroient de bon cœur leur vie pour le tesmoignage de son nom, & que le tyran fist allumer le feu quand il voudroit : à l'instant le feu fut allumé, le temple embrasé mis en cendre auec bien quinze ou vingt mille personnes qui estoient dedans.>>

[29] *Nicephori Callisti Xanthopuli, ... Ecclesiasticae historiae libiri decem et octo. ... è Græco in Latinum sermonem translati,* 1555, Basileae Per Ioannes Oporinum & Heruagium, p.263 <<Omnes nos Christini sumus, unum eumque solum DEVM & regem credimus esse CHRISTVM : & ipsi, Patrique eius, & Spiritui sancto sacrificare, atque nos omnes unà offere facile parati sumus.>> リヨン市立図書館蔵で同館のnumelyoで公開されている電子テクストによる。

[30] *HPe,* f.90v°.<<Pais par ce que ces ans passés les Anabaptistes ont voulu reueiller cest erreur qui estoit reiecté & anathematizé de toute l'Eglise, il y a plus de mil & quatre cens ans :>>

言及されているアナバプチストは、スイスで誕生した本来のアナバプチストとは異なる、別の人物、グループを指すのではないかと思われる。ボエスチュオーはここでは反三位一体論者としてアナバプチストを提示しており、この点で16世紀で最も著名なのは、1553年10月27日ジュネーヴでカルヴァンらによって火刑に処せられたミシェル・セルヴェである。

セルヴェとアナバプチストの繋がりは色々な面で指摘できる。まずスペイン生まれのセルヴェが1531年、1532年にバーゼルとストラスブールに滞在していた折、再洗礼派とその周囲にいた人物との出会い、交流があったことが知られている。例えばベナンはマルチン・ボルハウスMartin Borrhaus、カピトCapito、コンラート・フーベルトConrad Hubert、ヨハン・カンパヌスJohann Campanus、ベルナルト・ロートマンBernard Rothmann、メルキオール・ホフマンMerchior Hoffmann、ガスパール・シュベンクフェルトGaspar Schwenckfeldらと出会い、交流したと記している[31]。

さらにジュネーヴでの裁判でもセルヴェはアナバプチストとしても扱われた。1553年８月14日提出のカルヴァンの秘書ニコラ・ド・フォンテーヌによる告訴状では告発理由の一つとして、再洗礼派であることが挙げられ[32]、同年10月27日の有罪判決のなかでも、幼児洗礼批判が有罪の根拠の一つとなっている[33]。

そしてカルヴァンらにこのような理由で告発されたのは、なによりセルヴェ自身が幼児洗礼を否定し、再洗礼を認めたからで、1553年の刊行後直ちに焚書破壊されて今日僅かに三部しか現存していない、『キリスト教復原論』の中で次のように述べていた。

「幼児洗礼主義者は実際、自分たちには無用のキリストによる洗礼をヨハネの洗礼から区別できない。それ故、聖書が両者を区別し、その結果ヨハネにより洗礼を受けた者は、キリストの名において二度目の洗礼を受けた。それで幼児洗礼主義者はキリストによる洗礼を正しく考えていない。使徒言行録一九章〔四-五〕により悔俊と信仰の後でヨハネにより洗礼を受けた者がキリストの名において再び洗礼を受けるなら、ましてや幼児洗礼主義者により、信仰と理解なく、キリストの教会の外で洗礼を受けた者は、キリストの信仰とその教会において、再び洗礼を受けるべきである。」[34]

---

[31] R.-M. Bénin, Mcihel Servet, *Restitution du Christinanisme*, Honoré Champion, 2011, Tome I, Introduction, pp.43-45.

[32] *Corpus reformatorum* Volume XXXVI, Apud A. Schwetschke et filium, 1870, col.730 <<32. XXXIV Item que le Baptesme des petitz enfans est une invention diabolique, une fauseté infernalle pour destruire toute la chrestienté.>>「31XXXIII 幼児洗礼は全キリスト教を破壊するための悪魔の発明であり、地獄的欺瞞である、といわなかったかどうか」中村賢二郎ほか編訳、『原典宗教改革史』、ヨルダン社　1976、403頁。

[33] *Ibid*., col.828 <<Item et que le baptesme des petis enfans nest que une invention diabolique et sorcellerie.>>「尚また、幼児洗礼は悪魔の発明物にすぎず魔法だといっている。」同書、409頁

[34] Mcihel Servet, *Restitution du Christinanisme*, Honoré Champion, 2011, Tome II, p.1171. <<Nam pædobaptistæ non possunt inutilem eis Christi baptismum à Ioannis baptismo discernere. Cùm ergo scriptura inter eos discernat, vt à Ioanne baptizati, iterum in nomine Christi baptizarentur : sequitur, eos non restè tenere Christi baptismum. Si à Ioanne ipso post pœnitentiam et fidem baptazati iterum in nomine Christi baptizantur, acto. 19. multò fortius à pædobaptisitis, sine fide, sine intellectu, extra ecclesiam Chrisiti baptizati, sunt interum in fide Christi et eius ecclesia baptizandi.>>

また反三位一体論者のセルヴェはカトリックの神学者シエナのシクストSixte de Sienne（Sixtus Senensis）からも[35] アナバプチストの名で非難されている。

こうしてこの時代の最も著名な反三位一体論者のセルヴェはアナバプチストとしても認知されており、ボオエスチュオーが『迫害の歴史』でアナバプチストとして批判するものの中に、セルヴェを含めたと考えることは、以上のことでも十分ありうることだが、さらにボエスチュオーが具体的に挙げた聖書の一節を検討すると、この推論はより確度を増す。

『迫害の歴史』の中でアナバプチストの主張は、パウロの二つの書簡の一節を引いて、具体的に述べられている。即ち次のようにである。

「さて自分たちの教義をより権威づけるために、アナバプチストは神の御子を攻撃するために聖書を鞭とした。聖パウロの「フィリピの信徒への手紙」第二章を引用し、そこでは、イエス・キリストは自己を無にして、人間に似たものとして作られ、奴隷の形をとり、見かけは人間として現われうる、と言われる。そこからその身体は幻だと結論する。」[36]

「この者どもはさらに聖パウロのもう一つの一節を提出するが、それはより見かけを持っているように見える。それは、クジャクが羽根を太陽に広げさせるように羽根を広げさせ、それで、「コリントの信徒への手紙　一」第一五章から取ったこの大雑把な言葉を膨らまし詰めるときに、勝利の歌を歌ったと考える。そこで、聖パウロは、最初の人アダムは土から作られ地上的であり、第二の人救い主イエス・キリストは、天から来て、天上的である、と言われる。そしてそこからアナバプチストと他の者たちは、それゆえイエスは天上的身体を持ち、処女の物質で形成されも創造されもしなかった、と結論する。このようにしてこのごろつきどもは聖書のマントの下に自分たちの嫌悪が覆われることを望むのである。」[37]

言及されているのは、前者は「フィリピの信徒への手紙」第二章七－八節、後者は「コリン

---

[35] *Bibliotheca sancta*, Venetiis , apud Franciscum Franciscimus Senensem, 1566, p.836 <<Seruetus Anabaptista>>. オーストリア国立図書館蔵でgoogle上で公開されている電子テクストによる。 なおダランベールとディドロの『百科全書』はこの著者の記述に基づいて項目Servetistes の項目で<<Sixete Sienne donne le nom de *Servetiste* aux Anabaptistes, & il paroît qu'il emploie indifférement ces duex qualifications. Aussi la doctrine des anciens Anabaptiste des Suisse étoit-elle à celle de Servet.>>D'Alembert, Diderot, *L'Encyclopédie*, 1er édition 1751, Tome 15, p.120と記す。

[36] *HPe*, f.91rº <<Or pour mieux auctoriser leur doctrine ils ont faict leur baston de l'escriture saincte pour assailir le fils de Dieu. Ils citent ce passage de sainct Paul aux Philippenses second, où il dit que Iesus Chirst s'est aneanty soy mesmes, prenant forme de serf, estant faict semblable aux hommes, & en apparence se monstrant homme : de là ils concluent que son corps estoit vn fantosme.>>

[37] *HPe*, f.91vº-92rº <Ils produissent encores vn autre passage de sainct Paul, lequel semble auoir plus d'apparence : c'est cestuy cy, qui leur fait estendre leurs aelles comme paons au Soleil, & duquel ils pensent auoir chanté le dernier de leur victoire, qunad ils enflent & entonnent ces gros motz prins du quinziesme chapitre de la premiere aux Corinthiens, où sainct Paul dit que le premier homme Adam est faict de terre & est terrestre : le second homme à scauoir le Sauueur Iesus Christ est celeste, estant venu du ciel. Et de là les Anabaptistes & les autres concluent que Iesus Christ doncques a eu vn corps celeste, & qu'il n'a pas esté formé ny crée de la substance de la Vierge. Voyla comment ces canailles veulent que soubz le manteau de l'escriture toute leur abomination soit couuerte.>>

トの信徒への手紙　一」第一五章四七節である。ところでこの両箇所はセルヴェの最初の反三位一体の書、1531年に刊行された『三位一体論の誤謬について』と1532年刊行の『三位一体論対話編』で重要な論拠として挙げられている。

後者から述べると、このパウロの書簡の箇所は、『三位一体の誤謬について』で二回現われ[38]、何れもイエスの神性を強調するために使用されるが、ボエスチュオーの言うような人性を否定するまでの主張は、少なくともその箇所ではしていない。しかし『三位一体対話編』では調子が異なり、次のように述べている。

「しかし、私は、あなたがキリスト教徒であるなら、この肉が天から来たと当然考えるべきだと言おう。決して批判されえないキリストの言葉があるからで、「ヨハネによる福音書」6〔. 51〕で御自分とその肉は天から降ったと宣言される。天から降ったパンは自分の肉だと言われるから。同じく、天から与えられたマナの象徴は明らかにこのことを証している。マナが降ることはキリストの肉に帰せられ、それはその食べ物によって表現された食べ物であるから。同じく、第二の人キリストは天から天からとして来られた。「コリントの信徒への手紙一」15〔. 47〕」[39]

この箇所ではキリストの肉体が天から来たと主張され、あたかもキリストの人性はなきが如しと言わんばかりである。

「フィリピの信徒への手紙」第二章については、もう少し複雑である。セルヴェが『三位一体論の誤謬について』で取り上げるのは、同章の六－九節で、ことに第六節のウルガータ訳

---

[38] Michel Servet, *Sept livres sur les erreurs de la Trinité*, édition bilangue, Honoré Champion, 2008,p.199, 201<<Sed quia hæc Verbi arcanum præsupponunt, ad sequentes libros differantur. Potuisses tamen interim intelligere de cælo, id est de supernis, quia ut ipse testatur, Vos deorsum estis, ego de supernis sum, Iaon. 8. Potuisses etiam uerba CHRISTI spiritualiter sic intelligere, nam CHRISTVS in spiritu Dei præcessit omnia tempora, et erat in cælo, sicut et manet nobiscum usque ad consummationem seculi. Et eo solo quia uerba eius erant cælestia, debuisses concedere quod ipse è cælo erat, nam baptismus Iohannis è cælo erat, et secundus homo de cælo cælestis.>>「その間しかし「天上から」を上からと理解することができただろう。「ヨハネ」8〔. 23〕で御自身で証言されるように、「あなたたちは下のものに属しているが、わたしは上のものに属している」から。あなたはキリストの言葉もまたこの精神的意味で理解することができただろう。キリストはすべての時間において神の精神にあり、天にあったし、世界の終りまで私たちとともに留まられるから。そしてキリストの言葉は天上的であったというこの理由だけで、キリスト御自身が天上的であったと考えなければならなかっただろう。ヨハネの洗礼は天上からであり、第二の人は天上からであり、天上的であったからである。」; p.311<<ergo CHRISTVS è cælo est　quia secundus homo, de cæalo cælestis, et è cælo est, et in cælo est, quicquid est supra carnem et sanguinem.>>「それゆえキリストは天上からである、第二の人は天上からであり、天上的であったから。そして肉と血を越えるものはなんでも天上からで天にある。」

[39] *Dialogorvm de Trinitate libri dvo* Per Michaelem Serveto Anno M.D.XXXII, Sig.B1a.<<Ego autem dico, quòd, si Christianus sis, necessario te oportet concedere hanc carnem de cælo descendisse. Sunt enim uerba Christi, quae à nemine possunt calumniari, quibus se, & carnem suam de cælo descendisse clamat, Ioan. 6. nam panem illum, qui de cælo descendit, carnem suam esse dicit. Item, typus mannæ è cælo datae, clare hoc ipsum probat, nam descensus mannæ carni Christi est tribuendus, quia illa est cibus per illum cibum figuratus. Iem, secundum homo Christus uenit de cælo cælestis, I. Cor. 15.>> オーストリア国立図書館蔵でgoogle上で公開されている電子テクストによる。

<< 6 Qui quum esset in forma Dei, non duxit rapinam, parem esse cum Deo>>「キリストは神の性質ではあっても、神に等しいことを戦利品（略奪物）と見なさず」が問題となる。この箇所は難読箇所であるらしく、セルヴェも色々と論を展開した後、次のように言う。

「同じようにパウロは、二つの存在と一つの本質（duas res et unam naturam）があるなどとは言わなかった。また第二の位格が第一の位格と同じ本質（æqualis esssentia）を持つとも言わなかった。もしもパウロが、「この第二の位格は第一の位格と等しい本性（æqualis esssentia）であることを、分捕品のようには思わなかった」〔「キリストは神の形であらわれたが、神と等しくあることを固守すべき事（分捕品）とは思わず」というピリニ・六の言い換え［ウルガータ訳］〕と理解していたとすれば、「神と等しく」の代りに「第一の位格と等しく」と言わない理由は少しもなかったはずである。神の言は活きており〔ヘブ四・一二〕、そこでは「神から区別された何ものか（quid distinctum à Deo）」が言い表されている。そうでなければ、「分捕品」などという表現で混乱を引き起こす必要が何かあっただろうか。同じ存在、同じ本質（eadem res, eadem natura）であるもののうちに、「分捕品」などということがあり得るだろうか。それではパウロの語り方が軽々しかったことになってしまうだろう。」[40]

つまりセルヴェは「分捕品」の解釈から第一格（父）と第二格（子）の「本性」の違いを主張して、反三位一体論をここから開始する。セルヴェのこの論は難解でなかなかその概要は捉えがたいが、出村彰は、その後テルトリアヌスから借りたdispositio[41]（管理、処分、経綸（出村）の観念を用いて、「セルヴェの言わんとするところは、神は存在として三つの位格を持つのというのではなく、三つの在り方において自己を啓示するのだということであると思われる」[42]と解説する。

このようにボエスチューの挙げたアナバプチストの主張の基になっているパウロの二つの手紙の一節は、セルヴェの書のなかで、重要な問題の箇所に現われており、ボエスチュオーのアナバプチスト批判の論拠として使われている。そこでセルヴェの主張していることは、ボエスチュオーがアナバプチストの誤った説とするものと、完全に一致するものではないが、キリストの人性の軽視や三位一体の否定は、謬説とされたものと同じと見なすことができる。こうしてボエスチュオーのアナバプチストに反三位一体論者アナバプチストのミシェル・セルヴェの

---

[40]「三位一体論の誤謬について」出村彰訳 『宗教改革著作集10　カルヴァンとその周辺Ⅱ』教文館、1993、19頁：原文は以下の通り。Michel Servet, *Sept livres sur les erreurs de la Trinité*, édition bilangue, Honoré Champion, 2008, p.207, 209.<<Item, Paulus non dixit esse duas res et unam naturam : uel quòd secunda illa persona sit æqualis esssentiæ cum prima. Nam si Paulus intellexisse quod secunda illa persona sine rapina se esse æqualis naturæ cum prima arbitrabatur, quare non dixit, æqualem eam esse primæ personæ, et non Deo, nam uiuus est sermo Deo, et ibi quid distinctum à Deo notat. Quorsum etiam miscuisset de rapina sermonem ? Quæ potuit esse rapinæ suspitio in eo qui est eadem res, eadem natura, friuole namque locutus esset Paulus.>>

[41] Cf. Michel Servet, *Sept livres sur les erreurs de la Trinité*, édition bilangue, Honoré Champion, 2008, p.210, n.2.

[42] 出村彰、『宗教改革著作集10　カルヴァンとその周辺Ⅱ』、教文館、1993、解題、304－305頁。

姿を認めるうる。

しかし反三位一体を唱える「再洗礼主義者」はミシェル・セルヴェに限られない。イタリアのレリオとファウストの両ソッツイーニ、ポーランドに亡命して『神と子と聖霊の本当と偽りの神の一性について』*De vera et faux unius Dei Patris, Filii et Spiritus Sancti*を書いたジョルジョ・ビアンドラタなどほかにも反三位一体を主張した人たちがいた。これら再洗礼主義の流れを汲む根源的改革主義者もボエスチュオーが批判の対象にしただろうことは、ありえないことではないだろう。

第一書と第二書に見られたボエスチュオーの宗教思想の根本は、贖い主救い主であり、人性と神性を備えたキリストの信仰であり、父、子、聖霊の三位一体の玄義の尊重であった。これらは古代のニカイア・コンスタンティノポリス信条とカルケドン信条で確認されたことであり、ローマ・カトリックのみならず、ルター派カルヴァン派などの大部分のプロテスタントも承認するものである。そもそも『迫害の歴史』では、16世紀にカトリックとプロテスタントの間で論争の的となった、信仰のみによる義認、サクラメントの、特に聖餐の意義、神の予定などといった重大問題に関する言及はない。問題となるのは先に挙げた二つのことであり、それを再検討しようとする「再洗礼派」根源的改革派が批判の対象となった。出村彰が挙げた、セルヴェの二つの規範、「極端なほどに単純な聖書語句主義」とニカイア公会議以前への回帰[43]、こそボエスチュオーが厳しく咎めるものである。二つの原則を守る教会をボエスチュオーは支持するが、それがいかなる教会であるかは、第一書と第二書では明確ではない。第三書においては「古い教会」という表現が三回現われ（<<la vray & ancienne Eglise>>f.118rº, <<l'ancienne Eglise>>f.120vº, <<ton ancienne Eglise>>f.127rº）、また第一書の私たちが付加されたと考えた部分には、ペテロがローマ・カトリック教会の礎であることを権威づける「マタイによる福音書」の一節[44] が挙げられていて、ローマ・カトリック教会が示唆されている。しかしこれらの部分の真正さに疑問が残るのは私たちがこの論の前半で論じたことである。そうして見ると、表題の掲げる「カトリック教会」とは語の元来の意味の「普遍的教会」を示し、この書は必ずしもローマ・カトリック教会側に立つとは言えないだろう。この書の末にパリ大学神学博士の保証が与えられても、古代信条に則った宗教思想であれば、非難される余地はもとからないだろう。

16世紀後半のフランスはカトリックとプロテスタントの宗教的対立が先鋭化し、長い宗教戦

---

[43] 出村彰、前掲解説、302頁。

[44] *HPe*, f.20vº. <<Tu es bien heureux（dit le Sauueur）car la chair & le sang ne te la pas reueulé, mais mon pere qui est aux cieulx. Aussi dis-ie que tu es Pierre, & sur cette pierre i'edifieray mon Eglise, & les portes d'enfer ne pourront rien à l'encontre d'icelle.>>「おまえは実に幸いなるかな（と救い主は言われる）。というのも血と肉はおまえにそれを表わさないが、しかし天にます私の父なのだ。それゆえ私はおまえをペテロと言い、その石の上に私の教会を築こう、地獄の門はそれに逆らう何もできないだろう。」しかしここでも「天国の鍵」には言及されていない。

争に突入した。その時期には、プロテスタントのジャン・クレスパンの『殉教録』やカトリックのリチャード・ローランド（リシャール・ヴェルステガン）の『残酷劇場』[45] が書かれ、それぞれの立場から相手の残虐性を激しく攻撃した。ボエスチュオーの『迫害の歴史』はこれらの書とは一線を画し、迫害、殉教の例は古代に限られ、同時代のものは一つもない。上に見たように、ボエスチュオーの宗教信条はむしろより「エキュメニカル」なものに思われる。歴史家ドニ・クルゼは、1572年サン＝バルテルミーの大虐殺の年に刊行された『迫害の歴史』をこうした暴力を予感させる書の一つと見なすようだが[46] 、この年のこの書の出版は、第三書に豊富に見出される神の報復の記述から、機を見るに敏な出版印刷商がとった出版戦略にむしろよるのではないだろうか。

---

[45] 両書の抄訳がある。平野隆文訳、ジャン・クレスパン、『殉教録』、リシャール・ヴェルステガン『残酷劇場』、宮下志朗他編、『フランス・ルネサンス文学集　1』、白水社、2015、所載。

[46] Denis Crouzet, *Les Guerres de Dieu La violence au temps des troubles de Religion : vers 1525–vers 1610*, Champ Valllon, ©1990, Livre second, pp.86-87.

Étude de Pierre Boaistuau supplément 1
Histoire des persécutions

Yoshihiro KAJI

L'*Histoire des persécutions* est une œuvre posthume de Boaistuau, remaniée par un certain Pierre de Cisteres. Dans cet article, nous discutons d'abord sur l'authenticité de ce livre, et ensuite nous abordons l'idée religieuse de l'auteur.

La remarque dans l'<<argument de l'œuvre>>, la structure empruntée à l'*Histoire ecclésiastique* d'Eusèbe, la manière de composer, <<patchwork>> des ouvrages des autres auteurs comme Guevara, la particularité du style dans le Livre Troisième, tous ces faits indiquent que les Livres Premier et Second, excepté quelques passages, sont rédigiés par le Nantais, alors qu'il est très probable que le Livre Troisième soit retouché par son ami.

La principale idée religieuse de Boaistuau exprimée dans les deux premiers Livres est conforme au symbole de Nicée-Constantinople et à celui de Chalcédoine, c'est-à-dire l'affirmation de la sainte Trinité et la croyance au Rédempteur et Sauveur Jésus Christ composé de la divinité et l'humanité, les symboles approuvés également par l'Église catholique et par la plupart des protestants. Dans cette position il accuse les Anabaptistes qui remettent en cause ces questions fondamentales du Christianisme. Parmi ces réformateurs radicaux, on peut apercevoir la figure de Michel Servet, qui est censé le plus apparent antitrinitarien de ce siècle.